

# ラテン語と学術用語

山田正春（地質相談所）

## はじめに

イギリスのスコットランドに所在するネス湖で 怪獣を見たと報ぜられて以来 多くの調査・観測が行われ わが国からも調査班が現地へ赴くなど 世界の注目を集めた。 たしかに報道された写真でみるかぎり ネス湖の怪獣は実在の可能性があると見える。 しかもネッシーと名付けられたこの怪獣が 恐竜類に属するとして すでに中生代末に絶滅したとされているだけに 一層興味をそそるようだ。 何しろ「恐竜を見つけるほどドラマティックなことはない」といわれるのに こともあろうに化石ではなく 実物が現存することになるのだからそれも当然であろう。

ところが昭和52年盛夏には 日本漁船がニュージーランドの南島の南東沖で 巨大な動物を網にかけたのであるが それが何であるかで俄然世の注目を集め ニューネッシーとも称されている。 しかし残念ながら実物はなく 写真のみで わずかに毛の類が持ってこられ これが唯一の物的証拠となり その道の専門家によって調べられた。 動物学 水産学や古生物学から はては解剖学までわたる多方面の専門家の意見では 恐竜の仲間の首長竜 (plesiosaurus) ではないか いや鯨の一種ではと 意見が分れたようであるが 世界の専門家も それぞれ同じような意見を述べていた。 これらについては 読者の皆様 すでに先刻御承知のことで ここで改めて縷々述べるまでもあるまい。

しかしこの事件があつてから 俄かに恐竜についての関心が高まったのであるが 特に従来わが国では 子供の夢としても「恐竜」という言葉が一般的で「saurus ザウルス」という言葉 (正確な学名はラテン語の dinosaurus ディノサウルスで dinoは恐ろしいとか腕のあるとかの意 saurus はトカゲ又は竜で ギリシア語の deinosauros から来た言葉。 まさしく恐竜である。 英語: dinosaur 独語: dinosaurier 仏語: dinosauriens) がマスコミの波に登場するようになったのは 今度の事件がきっかけであろう。 そして saurus とは何語から来たのかとか 発音はザウルスでいいのか (正しいラテン語読みではサウルス) などなど 多くの質問をうける。 もとより医学 薬学をはじめ 学術用語はラテン語と密

接な関係があるが 地質学の分野でも勿論そうである。 日常当然のように使用されている学術用語も ラテン語に由来するものが多いのである。 筆者はもとより 言語学や古典語の専門家ではないが かつて滞仏中に一応ラテン語を習得したので それを要約し さらにギリシア系語詞にもふれながら ラテン語と学術用語について以下にのべてみようと思う次第である。

ラテン語 (Lingua Latina リングアラティナ) とは 古代に世界帝国を築いたローマ人の言葉であるが もとはイタリアのローマ周辺の Latini ラティニー地方で話されていた一方言である。 これは紀元前6~7世紀頃からイタリア中部の Tiberis 河畔の7つの丘に拠っていたローマ市民の言葉であるが Latini の一分派であるため 一般にその用語を Lingua Latina と呼んだのである。

小さな都市国家ローマが 地中海世界を征服してローマ帝国となるとともに その言語であるラテン語も その世界に広まり 通用する公用語・共通語として大いに幅をきかせ 地方によっては従来の土着語を圧して広く使用された。 したがってラテン文学とは ローマ人と彼等の征服した異民族とが ラテン語で書いた文学のことである。 この傾向は ローマ帝国の分裂・消滅(476年)後も 地方によっては持続され ラテン語そのものは文学および学術用語として中世にも使用され続けたのである。 パリでは ラテン区 (Quartier latin カルチエラタン) として 18世紀末までラテン語が通用していた一画が 現在も残っている。

民衆の間で話されていたラテン語は いわゆるローマンス語 (Linguae Rōmānae) と称されるイタリア語 フランス語 スペイン語 ポルトガル語 ルーマニア語などへ変化して行つたが これらはいづれもラテン口語の地方的文化によって出来た言語である。

## ラテン語の歴史

ラテン語は 紀元前三世紀頃にはじまり 文学・歴史・弁論・哲学をはじめ諸科学にわたって その著述に使用され 中世に入っても依然として教養ある人々に愛用されて 宗教界は勿論 学術用語としても広く使用され 現代にいたつた。 したがって広い意味でのラテン文学

表1 ラテン文学史(年表)

政治史	王制	共和制期	帝制期		中世(時代)
年代	七五三 五〇九 二四〇	八〇頃	二四〇頃 一八〇頃	四七六	一三三三
文学史	初期	発展期	古典期	後期	キリスト教期
ラテン語史	古ラテン語	古典ラテン語	後期ラテン語	キリスト教ラテン語	中世ラテン語

注 (とくにラテン語史の時代区分については異説がある。)

史は表1のように非常に永い歴史を持っているが各時代の特長と代表的人物を簡単に述べるとつぎのようになる。

- 1) 初期 (753—240 B. C.)…記述が国家と宗教に奉仕していた時期で 年譜・法文(ローマ法)や墓碑銘にみられるのみである。
- 2) 発展期 (240—80 B. C. 頃)…ギリシア文化の愛好者で 貴族であるスキピオー(Scipiō)らの庇護の下に 詩人たちがラテン語を磨き かつ文学を發展させた時代。ラテン詩の父と呼ばれたエンニウス Ennius (239—169 B. C.) など。
- 3) 古典期 (80 B. C. 頃—A. D. 14)…すぐれた作家が輩出した時代で 現在われわれが学ぶラテン語は主としてこの時期の言語を標準としている。將軍で作家でもあったカエサル(英語読みではシーザー) Caesar (100—44 B. C.) 多才の政治家キケロー Cicerō (106—43 B. C.) など。
- 4) 後期 (14—180頃)…詩が衰え 散文が技巧に傾いた時代。哲学者セネカ Seneca (4—65) など。
- 5) キリスト教期 (180頃—476)…キリスト教護教作家の時代で 古代ローマの伝統的な文学は衰退した。日本でよく知られる思想家アウグスティヌス Augustinus (354—430) など。
- 6) 中世期 (476—1321)
  - イ) 衰退期 (5世紀—7世紀)…ヨーロッパが 異民族の侵入によって暗黒であった時期。博物学者イシドールス Ishidōrus (570—636) キリスト教学者グレゴリウス Gregōrius (538—593) など。

表2 ラテン語の字母

大文字	小文字	名称	大体の音価
A	a	ā	a, ai
B	b	bē	b
C	c	kē	k
D	d	dē	d
E	e	ē	e, ei
F	f	ef	f
G	g	gē	g
H	h	hā	h
I	i	ī	i, ii
(J)	(j)		j
K	k	kā	k
L	l	el	l
M	m	em	m*
N	n	en	n
O	o	ō	o, oi
P	p	pē	p
Q	q	qū	kw
R	r	er	r
S	s	es	s
T	t	tē	t
(U)	(u)	ū	u, ur
V	v		w
X	x	ix	ks
Y	y	ȳ(ȳ psilon)	y, yi
Z	z	zēta	z

ロ) 復興期 (8世紀—10世紀)…シャルルマーニュ Carolus magnus (762—814) によって文芸が復興された時期。

ハ) 隆盛期 (11世紀—13世紀)…いわゆる「十二世紀ルネッサンス」を中心に 中世ラテン文学の栄えた時期。ディエスイーラエ Diēs Īrae の宗教詩など。

ラテン字母と発音

われわれが現在学ぶラテン語 すなわちラテン文学の古典期(西暦第一世紀頃)に用いられていた正式な字母(Elementaつまりアルファベット)は表2の通りで英語などより少ない23文字である。なお古典期には大文字しかなく 小文字は中世に出来たものである。また現代では一般的に固有名詞(それから派生した形容詞 副詞)と 文頭のみ到大文字を用いるのが慣例である。

ラテン文字 すなわちローマ字は もともとギリシア文字(その中の西ギリシア系)から出ているが それから若干の変化を受けついでいる。YとZは古典期に初めてギリシア語の流入に伴って 公に採用された。

ラテン語の発音は 表2に示した音価によるが 一字

一音が原則の いわゆるローマ字であって 近代語のように 発音しない文字はなく 発音は容易である. 詳細は省略するが 注意すべきものをつぎにのべる.

Cは元来[g]の音を表わし 従ってCとKとは異なっていた. [g]の音を表すためにGが作られてから 次第にCがKにとって代ることになった. 一方Kは kalendaeカレンダエ:朔日(わが国ではカレンダーの語が一般化している)の他は使用されなくなった.

Iは母音[i]のみならず 半母音[j]にも用いられていた. しかし普通両者を区別して [j]に対してはJ j を用いている. ibi イビ そこに jūnior ユーニオール より若い Vは半母音[w]にも母音[u]にも用いられていた. これも便宜上区別して [u]に対してはU uを用いる.

vinum ウィーヌム ぶどう酒 ūnus ウーヌス 一つ(の) Sは常に無声音を表はし いかなる場合にも有声音[z]になることはない. rosa ローサ パラの花

Xは常に [ks]で [gs]になることはない maximus マクシムス 最大の

母音には長短があり 長母音の上には長音符 Apex (ā ē など)をつける. 長音符のない母音は すべて短母音と解してよいが 特に短母音であることを強調する必要のある場合は ä ë の記号をつける.

また複母音としては ae アエ au アウ ei エイ eu エウ oe オエ ui ウイの6つがあるが これがまたラテン語の特長である. saeculum サエクルム 時代 世紀 poena ポエナ 罰 aura アウラ そよ風 など. その他子音 音節など多くの規則があるが省略する.

ラテン語のアクセントは英語のような強調のアクセント(stres accent)とちがい 高低のアクセント(pitch accent)で アクセントのある音節は 他の音節に比して高い調子で発音される. ラテン語のアクセントには つぎのような簡単な原則がある. ① 最後の音節におかれることはない. ② 語末から三音節以上にさかのぼらない. ③ つまり語末から二音節か三音節にくる訳である. ④ したがって二音節の語では 当然はじめの音節にアクセントがある. sulphur スルブル硫黄. ⑤ 三音節かそれ以上の音節の時は 語末から二番目の音節が長ければそこにくる. fortōna フォルトーナ幸運. ⑥ 語末から二番目の音節が短いか 長短共通の時は三番目の音節にくる. pecūnia ペクーニャ 金銭.

### ラテン語の文法と変化

ラテン語の品詞の特長として冠詞がないことがあげられる. したがって冠詞がないので vir ウィルが「その

男」か「ある男」かは 文脈で判断するより方法がない訳である.

ラテン語には変化(活用)する語と 変化しない語とがある. 変化するのは名詞群(名詞 数詞 形容詞 副詞)と動詞とで 他の品詞は変化しない. われわれが 学術用語として関係の深いのは 名詞と形容詞であるので この変化について簡単にのべる.

名詞の変化とは 名詞がそれぞれ特殊な状況に応じていくつかの特別な語尾変化を示すことをいうが その変化には 性 genus ゲヌス 数 numerus ヌメルス 格 casus カススの三つがある. なお形容詞の変化は 大体名詞変化に従うものである.

性はドイツ語などと同じで 男性 m; masculinum ムスクリーヌム 女性 f; fēmininum フェミニヌム 中性 n; neutrum ネットルムの三種がある. これは勿論文法的な性で 自然性には影響されるが 直接には関係なく 語形によってある程度のルールがある.

数は単数 s; singularis シングラーリスと複数 pl; plūralis プルーラーリスがある.

格とは ある名詞(あるいは代名詞 形容詞)が それぞれの具体的な表明 つまり実際の思惟判断に当り その表現である文章中において 該当語の有する立場や位置 つまり他語との関係を表わすために取る一定の語形をいう. ロシヤ語やドイツ語などでは この格の概念はかなり明瞭であるが 英語やフランス語・イタリア語などのローマーンズ語などでは 昔あった格が融合してしまって あまり明瞭ではない.

ラテン語には つぎのような六つの格形がある. さらに名詞の変化は 通常第一から第五までの五種類に分けられる. この区分は 専らその名詞の語幹によるもので つぎのようになる.

	語幹	原形
第一変化ーaに終る語幹	lūna	lūna f, 月 ルーナ
第二変化ーoに終る語幹	caelo	caelum n, 空 カエルム
第三変化ーiとすべての子音に終る語幹	pisci	piscis m, 魚 ビスキス
第四変化ーuに終る語幹	ped	pēs n, 足 ペース
第五変化ーēに終る語幹	manu	manus f, 手 マヌス
	diē	diēs m, 日 ディエース

第一変化に属する lūna f, 月の格変化を単数 複数別

	単数; s	複数; pl
主格(nom)	lūna 月は	lūnae 月らは
属格(gen)	lūnae 月の	lūnarum 月らの
対格(acc)	lūnam 月を	lūnās 月らを
与格(dat)	lūnae 月に	lūnis 月らに

従格 (abl)	lūnā	月より	lūnis	月らより
呼格 (voc)	lūna	月よ	lūnae	月らよ

第二変化から第五変化までは省略するが、それぞれ独自の变化をする訳で、さらに形容詞も名詞にしたがって变化するのであるから、ラテン語はかなり厄介な言語であるといえよう。

### ラテン語とギリシア語

ギリシア語は、独特の字形の24文字よりなるが、小文字はラテン語と同じく中世以降のものである。われわれは、一般に数学において親しんだものであるが、最近では国産自動車の名称に使用されたりしているようである。

ギリシア文化の最盛期、文学の黄金時代は、西暦紀元前五世紀から四世紀にわたる時代であった。古典ギリシア語と呼ばれるのは、この時期のその中心であった都市アテナイの標準的な言語ともいべきもので、PLATON や ISOKRATES などの作品にみる事が出来る。

ギリシア語もまたラテン語の場合と同じように、欧米諸国では中世以降の伝統によって、それぞれの国によって、バラバラな発音や読み方を用いてきた（ここではギリシア語の発音や文法は省略する）。そして近代語とくに学術用語中に、大幅に取り入れられているが、大体は一応ラテン語の枠内で行われてきた。殊にギリシア文字は、西欧諸国の使用するラテン文字に書き変えねばならなかったことが、一層ラテン化の傾向を増したのであろう。

かように、ラテン語の中には、極めて多数のギリシア語が混入しているが、これは昔、ことにローマの開国以後、その版図の拡大につれて、丁度アレクサンデル大帝後の、ギリシア文化拡散期にあった地中海（ことに東部）世界を、つぎつぎと征服し、その文化を大いに取り入れたからに他ならない。高度の文化を誇り、絢爛たる文芸や美術に飾られたヘレニズム世界は、質朴なローマ人を一挙にしてとりこにしてしまった。文化と共に当然ギリシアの語詞もローマに流入した。これは日本語中における漢語や、明治以降の西欧語とくに英語をみれば容易に理解出来る。しかしわれわれが必要とする学術用語中のギリシア系語詞は、むしろ近代科学の発達に伴って、多種多様な創造物や理念・概念に、ギリシア語の造語力が極めて豊かなものであるとする価値を認められたのであるともいえよう。かようにしてギリシア系語詞は、その特殊性、新鮮な魅力、音声の美、造語力の強靱さ自由さによって、今日までぼう大な学術用語時には日常語の根拠となってきたのである。勿論学名

や学術用語として、ラテン語が大いに使用されているが、他面何かの区別を必要とする時は、例えば動物・植物の種属名、医学の病名など、複雑な命名構成に手軽にギリシア系語詞が使用される。そしてラテン語詞とギリシア系語詞とが混合した、いわゆる「重箱式」の名称もよくみられるのである。

### 地質学関係の学術用語とラテン語

地質学関係の学術用語も、医学・薬学の場合と同じように、大部分がラテン語起源であるが、またしばしばギリシア系語詞ないしは語幹に頼るものも少なくない。一般的には古生物学の分野、つまり動物 animalia、植物 plantae が代表的で、その他層位学や構造地質学などにも多いが、岩石学や鉱物学では比較的少ないといえよう。しかしこれらについて詳しく述べればきりがないので、例をあげながら、さらにラテン語の学名のルールなどにもふれてみたい。

- 1) piscis, m, ピスキス 魚—piscis の語幹 pisci は i で終るので、第三変化に属し、性は男性名詞である。したがってその主格 (nom) の piscis となる。このように一個の名詞よりなる時は、単数・複数とも主格をとる。homō ホモ 人間 mammalia マンマーリア 哺乳類, sāl サール 塩 salarium サラーリウムは塩代つまり俸給となるが、当時は塩で俸給が支払われていたのである。biologia ビオロギア生物学。
- 2) valva avratae ヲェルウァ アウラタエ 大動脈弁—二個以上の名詞よりなる場合は、最初の名詞は主格 (nom) で二番目の名詞は常に属格 (gen) をとる。
- 3) Fossa magna フォッサ マグナ —E. NAUMAN が命名したもので、日本の最も重要な大構造の一つであり、本州の中央部を南北に横断する特異な地帯である。fossa は窪地 (f) magna は大きい形容詞でこの最上級は maximus マクシムス。このように、名詞+形容詞の形をとる場合は、名詞 形容詞とも主格 (nom) をとることになる。したがって第一変化に属する女性名詞 fossa の主格 fossa と大きい形容詞の女性主格形 magna をとって fossa magna となる訳である。  
linea alba リネア アルバ 白線 など
- 4) 以上が大体根幹になるのであって、さらに  
名詞 (nom)+名詞(gen)+名詞 (gen) corpus ossis pubis  
コルプス オシス プビス 恥骨体 など  
名詞 (nom)+名詞 (nom)+名詞 (gen)  
" + " + " +形容詞 (nom)  
" + " +形容詞 (nom)

などとなり、4個以上の場合には、適当な組合せを用いてよいことになっている。

### ラテン語の造語法

すべて語詞には 一次的に語根から直接に造られた語と 他の名詞・形容詞・動詞などから二次的に造り出された派生語とがある。 学術用語として応用の広いのはまたここで必要なのは 一定の名詞・形容詞からどのようにして他の品詞が造り出されるかということであろう。 これらについて簡単に 以下にのべる。

#### 1) 複合名詞の造り方

- ① 同等の立場にある二つの名詞(形容詞など)の場合には 第一語幹+第二語幹 が一般式である。
  - ② この際 第一語幹の終りが母音であるときはこれを i にかえ子音に終るものはこれに i を加える。 但し時に—o— に終るものもある。
  - ③ あるいは 第一語幹+i+第二語幹と考えてもよい。
- 以上を類別してのべると

第一語が名詞の場合 aurifex 金工 -aurum 金+faciō 作る  
 第一語が形容詞の場合 multi-formis 多形の -multus+form + (i-s)

第一語が名詞の格形よりなる場合 vēri-similis 本当らしい  
 第一語が 前置詞・接頭辞の場合

ab-	分離 除去など	abundantia	豊富 一杯
ad-	附加など	affectiō	傾向 状態
ante-	前 予見など	ante-cēdō	先行する
contra-	反対 対立	contrārium	対立する
		contrādicō	反駁する
con-	共に くるめ	concordia	コンコード 調和
dē-	除去 降下	dēmōnstrō	示す
ex-	外へ 出す	exteria	エクステリア
in-	中へ こめる	invēstīgō	調べる
inter-	間 中へ	intersum	関与する
		interia	インテリア
ob-	上へ 向って	omittō	オミットする みのがす
per-	通じて 変える	perfectē	完全に
post-	後で 後へ	posterior	よりおそい 後の
prae-	前に 前へ	prae-sēns	現在の
praeter-	越えて		

pro-	前へ 予め	procēdō	現われる
		providentia	予見
sub-	下へ	subitus	突然の
super-	上へ	superior	すぐれた

これはフランス語に入って sur となった。  
 trāns- こえて 横切って trānsitus 通過  
 その他 いくつかの 同格の働きをするが 独立では語詞の用をなさないつぎのような接頭語がある。

ambi-	両方	ambition	野心 名誉心
dis-	分散 分離	dispersus	ディスパージョン
in-	否定 反対概念の表示	inanimus	生命のない
re-	再帰 かえる	recondō	思い出す
sē-	分離 わける	scīparō	分離
ūni-	一つの	ūniversus	全部の
bi-	二つの	bi-pennis	双翼の
tri-	三つの	tri-ceps	三頭の

sēmi-	半分	sēmi-circulus	半円
centi-	百の	centi-peda	むかで

2) その他学術用語に用いられるものに つぎのようなものがある。

- ① 縮少辞 lūnula 小月形 corpus-culum 小体 など
- ② 名詞より形容詞の形成  
 これには非常に多くの方法が用いられる。  
 -ālis-, -āri-, alāris 翼の -āla 翼  
 -āto- …をもてる vertebrāta 脊椎動物 -vertebrae 脊椎  
 -ōso- …に富める formōsus 美しい -forma 姿  
 -io-, -eo-, -āceo-, -āno- など ferreus 鉄の -ferrum 鉄  
 osseus 骨の -ossis 骨 crūstācea 甲殻類 -crūsta 硬殻  
 herbācea, -herba 草 動植物の科名として多く用いられる。  
 -ārio-, -icio-, -ico- など contrārius 反対の -contra 反して  
 Āfricus アフリカの -After アフリカ人。  
 -ēnsis- これは地名などから形容詞を作る場合によく用いられる。 …で見出される …に属する  
 また名詞化して「…人」となる。 北京原人の学名 Sinanthropus pekinēnsis シナントロプスベキネーシスは 正確には「北京で見出される(た)シナ(中国)原人」
- ③ 形容詞より名詞が形成される場合があり また動詞の現在分詞も名詞化される。 さらに形容詞は種々な形成詞(接尾語)によって名詞化される (alti-tūdō 緯度 -altus 高い lati-tūdō 緯度 -latus 広がった)。 また動詞もよく名詞・形容詞化される (opīniō 意見 -opīnor 思う pressūra 圧力 -pressus 圧す mēnsūra 測定 -mētio 測る victor 勝利 -vincō 勝つ 征服する sē-men 種子 -serō 播く など)が詳細は省略する。

### ギリシア系語詞と造語法

すでに述べたように ギリシア語は近代語や ほとんどあらゆる古代語の中でも 最も造語力に富む言語といわれる。 したがってラテン語でも 近代の多岐に発展した学術用語として ギリシア語の性能を便利かつ有効に応用されて 広く使われるにいたった。 しかしこの造語法も その要旨はラテン語の場合と 大体同趣である。 つぎにその概要をのべる。

#### 1) 複合名詞—それぞれの語幹に 適当な修正を加へ 語尾を与える

第一語幹+第二語幹+新語尾 となる。 第一語幹が —o— で終る第二変化名詞の時は そのまま使用できる。 第一変化の時は a を o に変え 他の変化の時は子音・i・u・に o を加えて つまり第一語幹+—o—+第二語幹として造語される この際邪魔になる母音(語幹 語尾の)は省略される。 例を示せばつぎの通りである。

chaetognatha 毛顎動物 -chaite 髪毛+gnathos 顎  
 arthro-poda 節足動物 -arthron 関節+pūs 足  
 この類は 二つの名詞(または形容詞など)が 結合して新たな形容詞(よく名詞化する)に用いられる場合が多い。 動植物の類属種名などはこれに属する。 つまり動物 animalia や植物 plantae などの実名詞が省略されているもので 上記

の chaetognatha もこの類である。

## 2) 第一語が形容詞の場合も大体同じである

dinosaurus 恐竜 -dino 恐しい 腕のある+saurus トカゲ  
 protozoa 原生動物 -prōtos 第一の 初の+zō-on 動物  
 polynesia ポリネシア 群島 -poly 多い+nēsos 島+iā  
 barometer 気圧計 -baros 重さ+metron 測り

## 3) 接頭辞との関連も多くなる

われわれに関係あるものをのべると つぎのように多くある  
 が 通常使用している学術用語で 思い当られるものも多いこ  
 とと思う。

amphi- 両側に amphibia 両棲類 -bios 生  
 ana- 上に すっかり analysis 分析 -lyo 解く  
 anti- 対立して  
 apo- …から 離れて  
 dia- 通じて diameter 直径 -metron さしわたし  
 ek-, eks-, exo- 外に すっかり  
 en-, endo- 内に 内の  
 entropy エントロピー -tropos 方向  
 epi- 上に つけ加えて epiderm 表皮 -derma 皮  
 kata- 下へ すっかり katalog カタログ -leg 数える  
 kathode 陽極 -hodos 道  
 meta- 後で 変えて metamorphosis 変形 -(morpho-o 姿  
 を変える)+si (こと)  
 para- 傍ら 外れた parallel 平行 -allelōs お互いの  
 peri- 周囲 ぐるりに period 週期 -hodos 道  
 pro- あらかじめ programme プログラム  
 -gramma 書いた物  
 syn- 協力して system システム -syn+stā 立つ+ma もの  
 hyper- つけ加えて hyperbola 双曲線 -bolē 投げること  
 hypo- 下に 不足

その他前置詞から出た接頭辞には つぎのものがある。

a-, an- 否定を表す anarchie アナーキー -arche 統治  
 dys- 悪い 非 dys-pepsie 不消化 -pepto こなす  
 eu- よい 立派な euphony 音のよい調和 -phone 音  
 hetero- 異なる hetero-genous 異質の -genos 属 族  
 homo- 同じ homo-genous 同質の  
 mono- 単独の monotony 単調 -tonos 調子  
 di- 二つの di-stoma ジストマ虫 -stoma 口  
 tri- 三つの Trigonometrie 三角術 -tri+gon 角 ひざ  
 hēmi- 半分の hēmiptera 半翅類 -pteron 翼  
 その他 iso- 等しい meso- 中間の palin 再び poly 多  
 など さらに動詞幹よりのものなど あげればきりがないので  
 この程度で省略する。  
 なお -ios, -iā, -ion は …に属するの意で この語形は元素  
 名としてよく用いられる。  
 hēlium ヘリウム 太陽の元素 -hēlios 太陽  
 uranium ウラニウム 天空の元素 -ūranos 天空

## 4) 名詞の形成

これについても 特に学術用語の形成に重要なものだけをあげ  
 る。

### ① 形容詞より名詞を造る接尾辞

-tēs 性質を表わす poiotes=quantitas 量

-iā, -siā 性質 状態を表わし 近代語では -ie, -y となる。  
 anomalia アノマリー -an 否定辞+homalo-s 同じ+ia  
 biologia 生物学 -bio 生+log-s 学+ia

### ② 動詞幹より名詞形成

-tos, -tē, -ton …されたもの asbestos 石綿 -sbes- 火を消す  
 asphalton 瀝青 -sphal 滑る  
 -tēs …する人 poiotes 詩人 -poet 詩  
 -tēr …する人 crater 噴火口—これは混酒器 krater の形から  
 名付けられた  
 -ma …された物 被形成物 magma マグマ  
 -ōn する人 もの ion イオン -i 行く hormon ホルモン  
 -hormao 促す はげます  
 -menos, -menē, -menon される人 もの phaenomenon 現象  
 -phaino -mai 現われる 見える  
 -ismos …主義 (ラテン -ismus)  
 -istēs …に關係ある 近代語では socialist pinist など

## 5) 混合方式構成

便宜を主とする近・現代科学においては ラテン語系  
 とギリシア語系とを混交し 随意的な 都合のよい語詞を  
 造りあげることが多い。 いわば重箱式の読み方 造り  
 方である。 molluscoidea 擬軟体動物 -mollusca (ラ  
 テン系) 軟体動物 貝類+oideo (ギリシア系) …のよう  
 な物

proto-chordata 原索動物 -proto 初めの+chorde 紐  
 索+āto (ラテン系) …を有するもの

この類は 身体部位名称にかなり多い。 解剖学的な  
 名称に 呼び易い方を特に選ぶからであろう。 一般に  
 はラテン語だが まれにギリシア系名詞が入っている。

hepar 肝臓 (ラテン語 hepatitis) gaster 胃も ラテ  
 ン語の ventriculus (venter は腹) より この方が短か  
 く 特長的であるため好んで用いられるようである。

これは伝達の一つの要項である 明瞭性を重視した命名  
 方針によるといえよう。 ギリシア名は かような理由  
 でしばしば使用される。

## おわりに

以上にラテン語を主とする古典語と その造語法およ  
 び学術用語などについてのべた。 もとよりラテン語は  
 死語であって 標準語がどこかで話されている訳ではな  
 い。 したがってその国々の言語の特性に応じて 適当  
 に使用されて良いという論法も ある程度は理解出来る。  
 しかしこと学術用語に関する限り やはり発音・文法・  
 造語法とも 国際的に通用するよう統一されるのが適当  
 であろう。

それはさておきギリシア文化は 近代科学の礎石とな  
 ったアリストテレスをはじめ ヒポクラテスによる水銀  
 (辰砂)の利用に端を発した近代医学への発展 などの  
 [以下 37 頁下段へつづく]